修道

No.59

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園（中・高）同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241－8291　FAX(082)249－0870
TEL(082)241－6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp

5月の合同懇親会にて挨拶をされる大田哲哉（中・高）同窓会会長

目　次

同窓会ニュース

平成18年度予算を承認……1168
平成17年度決算を承認……1171

支部だより

修道医会創立50周年記念式典・祝賀会のご報告……井内　康輝…1174
2006年関東支部のつどい「修道…あの頃に戻ろう！！」…中村　洋…1176

同期会報告

「旧中健児の集い」……佐々木　博…1179
白寿の恩師を囲んで同期会……菊田　良三…1180
30年目の修学旅行……沖野　恒巳…1181
旧制中学校33回卒クラス会……北川洸太郎…1183
臺灣修學旅行……河野富士雄…1184
修道中学3年6組クラス会開催について　中野　一美・仲田　章…1186
6年目に入った月例「修道火曜会」土井　淳夫…1187

特別寄稿

山田十竹先生履歴書……畠　眞實…1190
校長就任ご挨拶……田原　俊典…1197

人物往来

王国復活へ「チームワーク重視したい」　久保田文也…1198
個人顧客開拓急ぐ……福田　浩一…1198
「見て幸せになる人がいる」と信じ、過激ドラマ……遊川　和彦…1199
頼山陽著「日本外史」現代語訳が簡潔……藤高　一男…1199

訃　報……1200

事務局だより

修道に学んだ第21代内閣総理大臣加藤友三郎の銅像復元にご協力を……1200

訂正とお詫び……1203

同窓会ニュース

平成18年度予算を承認

平成18年３月27日
同窓会連合会、（中・高）同窓会幹事会

挨拶をする高校50回同窓大会世話人

合同幹事会記録

日　時　平成18年３月27日(月)
　　午後６時半～午後７時半
場　所　修道中学校・修道高等学校
　　本館３階　大会議室
出席者　（敬称略）

幹事

大田　哲哉　　高木　一之　　土井　洋二
貫名　　賢　　伊藤　學人　　松田　　弘
脇浦　則行　　阿曽沼龍雄　　仁井田幸雄
菊田　良三　　奥窪　和夫　　桐林　正樹
増原　義剛（代理：高橋）
今井　誠則（代理：菊崎　賢）
笹野　正明（代理出席）
藤居　道正　　河口龍太郎　　廣谷　　清
和田　章宏　　中村靖富満　　中島　弘規
井上　　徹　　久保　康治
大方幸一郎（代理：下川　信宏）
北村　直幸　　田戸　　亨　　佐野　　智
西尾　尚士　　住田　　進　　加藤　省吾
武安　紘二　　庄子　佳良　　岡本　幸士
篠原　敦子　　江川　準一　　程川　道彦
住田　　敏　　久保　弘睦　　畑尻　隆司
佐々木慶市　　辻　　誠治　　酒井　一成

事務局

田中　佳樹　　近川　俊治　　島田　枝奈
若宮　寿仁

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田　哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があり、慣例により大田会長代理が議長となることが了承された。

議　案

1．修道学園(中・高)同窓会会則の改正について

事務局より、修道学園（中・高）同窓会会則の改正についての説明がなされ、審議の結果、原案通り承認された。

趣旨：会則に定める『「幹事の選出」における申し合わせ事項』第1項の実施にあたり、幹事定数の増員を行い、これにかかる条文を改正する。

新旧対照表

新	旧
第1条～第7条　略	第1条～第7条　略
第8条　本会に次の会員を置く。 一．幹事70名以内。ただし、13名を下ることはできない。 二．監査　3名 三．評議員　各回卒業生より若干名	第8条　本会に次の会員を置く。 一．幹事56名以内。ただし、13名を下ることはできない。 二．監査　3名 三．評議員　各回卒業生より若干名

2．同窓会連合会及び(中・高)同窓会役員の選出について

大田会長代理より、辞任の申し出のあった森本　弘道連合会会長及びご逝去された平岩　久雄幹事の後任の選出、(中・高）同窓会副会長・2名の補充選任、同窓会会則の『幹事選出における申し合わせ事項』第1項に定める同窓大会担当世話人卒業回数からの幹事選任について諮られ、先に開催した正副会長会議で検討した改選案を審議いただきたい旨の提案がなされた。修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会役員の選出についてが配布され、審議の結果原案通り承認された。その後当日ご出席の桐林氏、廣谷氏、中村氏、住田氏から就任の挨拶がなされた。

◎辞　任

連合会会長・幹事	森本　弘道（高7回）
連合会幹事	平岩　久雄（高11回）
中高幹事	平岩　久雄（高11回）

◎新　任

連合会名誉会長・顧問	森本　弘道（高7回）
連合会会長・幹事	大下　龍介（高7回）
連合会幹事	桐林　正樹（高11回）
中高副会長・幹事	廣谷　　清（高28回）
中高副会長・幹事	中村靖富満（高30回）
中高幹事	桐林　正樹（高11回）
	上垣内裕輔（高47回）
	三宅　泰雄（高48回）
	住田　　進（高49回）

3．(中・高)同窓会個人情報の保護に関する規則について

事務局より修道学園（中・高）同窓会　個人情報の保護に関する規則（案）についての説明がなされ、審議の結果、原案通り承認された。

4．平成18年度修道学園(中・高)同窓会予算について

平成18年度修道学園(中・高)同窓会資金収支予算書(案)について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、入会金852,000円　終身会費1,988,000円　名簿売上代1,000円　預金利息96,000円　雑収入500,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　名簿作製引当特定預金からの繰入収入1,000円　陶板画レプリカ売上代150,000円　小計は3,589,000円となり、前年度繰越金23,637,000円を合わせると、**収入の部の合計は27,226,000円となる。**支出の部は、事業費2,398,000円（内訳：名簿作製費1,000円　激励費300,000円　同窓大会補助金200,000円　募金事業費1,000円　その他の事業費1,896,000円）　業務費659,000円（内訳：会議費205,000円　通信費120,000円　慶弔費200,000円　諸費134,000円）　その他の支出381,000円（内訳：連合会分担金284,000円　事業基金引当特定預金への繰入支出96,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円）　予備費500,000円　小計は3,938,000円となり、収入合計から差し引いた**次年度繰越金は23,288,000円となる。支出の部の合計は27,226,000円となる。**

5．平成18年度修道学園同窓会連合会予算について

平成18年度修道学園同窓会連合会資金収支予算書(案)について事務局から説明がおこなわれた。収入の部は、分担金1,536,000円　預金利息32,000円　雑収入1,000円　事業基金引当特定預金からの繰入収入1,000円　小計は1,570,000円となり、前年度繰越金16,162,000円と合わせると**収入の部は17,732,000円となる。**支出の部は、事業費600,000円　業務費645,000円（内訳：会議費195,000円　通信費150,000円　慶弔費150,000円　諸費150,000円）　その他の支出33,000円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出32,000円　名簿作製引当特定預金への繰入支出1,000円）　予備費500,000円　小計1,778,000円となり、収入合計から差し引いた**次年度繰越金は15,954,000円となる。支出の部の合計は17,732,000円となる。**

以上、（中・高）同窓会予算および同窓会連合会予算は審議の結果原案通り承認された。

広島修道大学大学院同窓会からの報告

脇浦大学院同窓会名誉会長より30周年を迎える同窓大会は6月24日(土)に開催する予定である旨の報告がなされた。

広島修道大学同窓会からの報告

11月4日(土)に同窓大会をリーガロイヤルホテルで開催する予定であり、大勢の卒業生が集まるよう努めている旨の報告がなされた。

土井名簿委員会担当副会長からの報告

個人情報保護法下における名簿の作成について、名簿委員会並びに正副会長会議において審議を重ね、名簿の作成、配布については今後慎重な対応が望ましいとのことから当面、同窓会名簿の作成、配布は見送り、同窓会が保有している同窓生の個人データについては、逐次最新のデータ化を図り、その維持管理に努めることとする旨の報告がなされた。

貫名同窓大会担当副会長からの報告

同窓大会担当世話人（高校50回）の紹介がなされた。その後世話人から、大会は9月9日（土）18：00からリーガロイヤルホテルで開催予定であり、今年度の同窓大会はコンセプト「和」を掲げて準備をしている旨の挨拶がなされた。

同窓会ニュース

平成17年度決算を承認

平成18年6月1日
同窓会連合会、(中・高)同窓会幹事会

幹事・評議員合同懇親会の様子

合同幹事会記録

日　時　平成18年6月1日(木)
午後6時半～午後7時

場　所　ホテルセンチュリー21　2階フォルザ

出席者(敬称略)

幹事

大田　哲哉　　高木　一之　　土井　洋二
貫名　　賢　　伊藤　學人　　松田　　弘
廣谷　　清　　中村　靖富満　上野　淳次
脇浦　則行　　河野　徳男　　小尻　正俊
阿曽沼龍雄　　下村　幸男　　仁井田幸雄
菊田　良三(代理：河野　富士雄)
奥窪　和夫　　山下　　泉　　桐林　正樹
増原　義剛(代理：菊崎　賢)
藤居　道正　　河口龍太郎　　中本　高明
中本　憲治　　福原　俊二　　和田　章宏
川崎　博行　　大内　茂稔　　久保　康治
大方幸一郎　　田戸　　亨　　西尾　尚士
三宅　泰雄　　住田　　進　　中島　弘規
武安　紘二　　山本　繁生　　岸　　英雄
細田　信行　　庄子　佳良　　岡本　幸士
江川　準一　　久保　弘睦　　畑尻　隆司
西林　洋治　　辻　　誠治　　酒井　一成

事務局

田中　佳樹　　近川　俊治　　島田　枝奈
石井健二郎

議事及び審議の結果

議案の審議に先立ち、修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会との合同幹事会を開催する旨の宣言がなされた。

大田哲哉同窓会連合会会長代理から開会の挨拶があった後、慣例により大田哲哉同窓会連合会会長代理が議長となることが承認された。

議案

1．平成17年度修道学園同窓会連合会収支決算について

事務局より、平成17年度修道学園同窓会連合会資金収支決算書について説明がなされた。収入の部は、分担金1,548,000円、預金利息16,020円、雑収入０円、小計1,564,020円となり、前年度繰越金15,146,432円を合わせると、**収入の部の合計は16,710,452円となる。**支出の部は、事業費347,550円、業務費188,097円（内訳：会議費62,542円、通信費22,695円、慶弔費91,000円、諸費11,860円）、その他の支出16,005円（内訳：事業基金引当特定預金への繰入支出16,005円、名簿作成引当特定預金への繰入支出０円）予備費０円、小計551,652円となり、収入合計から差し引いた**次年度繰越金は16,158,800円となる。支出の部の合計は16,710,452円となる。**

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金7,618,740円、名簿作製引当特定預金504,727円、一般会計預金16,158,800円となっている。負債・資本の部は、資本が合計24,282,267円となっており負債はない。

続いて、辻監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

同窓会連合会決算は、全員異議なく承認された。

2．平成17年度修道学園(中・高)同窓会資金収支決算について

事務局より、平成17年度修道学園(中・高)同窓会収支決算書について説明がなされた。収入の部は、入会金870,000円、終身会費2,030,000円、名簿売上代10,800円、預金利息48,034円、雑収入1,044,792円、事業基金引当特定預金からの繰入収入０円、名簿作製引当特定預金からの繰入収入4,622,239円、陶板画レプリカ売上代502,944円、小計9,128,809円となり、前年度繰越金20,615,149円と合わせると、**収入の部の合計は29,743,958円となる。**支出の部は、事業費3,312,475円（内訳：名簿作製費2,415,000円、激励費275,000円、同窓大会補助金200,000円、募金事業費０円、その他の事業費422,475円）、事務費384,541円（内訳：会議費34,996円、通信費86,398円、慶弔費178,250円、諸費84,897円）、その他の支出2,338,013円（内訳：連合会分担金290,000円、事業基金引当特定預金への繰入支出48,012円、名簿作製引当特定預金への繰入支出2,000,001円）、予備費０円、小計6,035,029円となり、収入合計から差し引いた**次年度繰越金は23,708,929円となる。支出の部の合計は29,743,958円となる。**

続いて、事務局より陶板画レプリカ販売に係る収支計算書についての説明が行なわれた。収入の部は陶板画レプリカ販売収入510,000円、預金利息３円、**収入の部の合計は510,003円となる。**支出の部は、陶板画レプリカ発送費5,009円、諸費2,050円となり、**本会計への繰入支出は502,944円となる。支出の部の合計は510,003円となる。**

次に貸借対照表についての説明が行なわれ、資産の部は事業基金引当特定預金19,122,716円、名簿作製引当特定預金０円、一般会計預金は23,708,929円、現金・切手は０円となっている。負債・資本の部は、資本が合計42,831,645円となっており負債はない。

続いて平成17年度修道学園（中・高）同窓大会について松田担当副会長より、昨年は新たな試みで広島修道大学のチアリーディング部に演技を披露していただいた。多くの同窓生に参加していただき、感謝している旨の報告があった。続いて同窓大会世話人より平成17年度修道学園（中・高）同窓大会決算書についての説明がな

された。収入の部は、補助金200,000円、大会誌広告協賛3,840,000円、会員券裏面広告協賛150,000円、会員券売上1,788,000円、寄付金160,000円、預金利息18円、**収入の部の合計は6,138,018円となっている。**支出の部は、大会誌作製費2,334,150円、大会運営費2,206,347円、広告宣伝費297,780円、通信費282,719円、事務費41,724円、交通費42,860円、会議費333,205円、支払手数料95,975円、収入から差し引いた**余剰金は503,258円で、平成18年度において本会計へ繰り入れる予定である旨の説明がなされた。支出の部の合計は6,138,018円となる。**

続いて、中島監査より、証憑、帳簿、預金通帳等の関係書類を監査した結果、いずれも適正に執行、管理されていた旨の会計監査報告がなされた。

中・高同窓会決算は全員異議なく承認された。

4．報告事項

支部総会及び同期会の開催日時・場所等についての説明がなされ、同期会への配布資料（同窓会報誌「修道」、学園通信等）の希望があれば、お申し出いただきたい。また、同窓会報誌「修道」への同期会等の開催報告をご寄稿いただきたい旨の報告と依頼がなされた。

その後、幹事・評議員合同の懇親会が開催された。まず同窓会連合会名誉会長であった故・原田睦民氏への黙祷が捧げられた後、大田哲哉連合会会長代理より開会の挨拶がのべられた。引き続き、（中・高）同窓会副会長に就任された廣谷　清氏、中村靖富満氏より就任のご挨拶をいただき、広島修道大学学長に就任された川本明人氏、修道中学校・修道高等学校校長に就任された田原　俊典氏から就任のご挨拶と各学校の近況についてのご報告をいただいた。林　正夫理事長の乾杯のご発声により会食となった。歓談中、同窓大会の案内がおこなわれた。大学院同窓会は脇浦則行会長から、大学同窓会は上野　淳次会長から、中・高同窓会は貫名　賢担当副会長及び高校50回世話人会代表からそれぞれ今年度の抱負が語られた。高木一之会長代理による締めの乾杯を行ない散会となった。

支部だより

修道医会創立50周年記念式典・祝賀会のご報告

修道医会幹事・事務局長　井内　康輝（高校19回卒）
（広島大学大学院医歯薬学総合研究科病理学）

ご来賓の方々との記念写真

修道医会は、昭和30年（1955年）、修道学園（旧制中学を含む）の卒業生で医師免許をもつものを会員として発足し、第１回は当時広島大学医学部が存在した呉地区で修道杏林会として開催されました。翌年、昭和31年（1956年）、修道医会と名称を改め広島市千田町で第１回大会を開催して今年（2006年）で50年を迎えました。

初代の会長は旧中３回卒業の後藤実先生、副会長は旧中36回卒業の岩森茂先生であり、以来、表１のように会長が受け継がれてきました。会誌創刊号（昭和43年１月発刊）に掲載されている会員は学生会員も含めて283名ですが、現在、事務局が把握している会員（主として広島県内で活躍している修道学園卒業の医師）は937名です。広島県医師会会員総数は平成18年１月現在、約6,600名ですので、約15％が修道医会の会員であることになります。

これまで10年毎の節目の年（1986年・30周年、1996年・40周年）に記念大会を開催してきましたが、今年は50周年を記念する大会となりました。去る平成18年（2006年）７月１日、広島全日空ホテルにて記念講演会、記念式典、祝賀会を162名の参加をえて盛大に催しました。記念講演会は、高校19回卒で全国レベルで活躍している人物とし

て、内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官の有本建男氏（演題は“21世紀の科学技術と社会”）と日本アイ・ビー・エム社長の大歳卓麻氏（演題は“イノベーション・・・地球は丸い？”）にお願いしましたが、官界及び経済界の立場から、これからの日本はどうあるべきかについてご教示をいただき、会員一同深い感銘を覚えた次第です。

次いで、記念式典にはご来賓として広島県知事、藤田雄山氏、修道学園理事長、林正夫氏（高校11回卒）、修道学園同窓会長、大田哲哉氏（高校11回卒）および修道中・高校校長、田原俊典氏をお迎えしました。これらご来賓から御祝辞をいただいた後、修道学園への寄附（スポーツ用車椅子2台と競技会用テント）を記念事業として贈呈することを発表しました。加えて、出席いただいた第9代盛生倫夫先生以下7名の歴代会長に感謝状を贈り、社会功労賞を梶川進先生（旧中29回卒）、向田一馬先生（旧中34回卒）に贈呈致しました。司会は松野堅先生（高校20回卒）にお願いしました。

祝賀会では修道学園からお借りした古いアルバムや各世代の卒業アルバムからなつかしい写真を抜き出しでスライド上映し、参加された皆様が想い出をたどられるお手伝いをしました。恒例の年次大会の倍以上の参加者のため、会場での談笑風景はいつも以上に活発で、司会者（佐藤修治先生、高校26回卒）は大変苦労された様子でした。最後に参加者全員で肩を組んで校歌を声高らかに合唱するのが恒例ですが、今年は会場に鳴り響く声も迫力満点でした。この日ばかりは修道の卒業生であることに、今更のように喜びと誇りを感じる一日となりました。

今回の創立50周年を記念してバッジ（図1）を作成致しました。このバッジを胸に着けて会に集まることを約束して事前に配布しておきましたが、多くの会員が着けてこられたことに感謝しております。修道医会は今後も会員一人一人の活躍で、修道学園の発展の一助となるように、その存在感を増していきたいと考えておりますので、同窓会全体の御支援をよろしくお願い申し上げます。

図1

表1．修道医会歴代会長

初代	後藤　実	（旧中3）	（S30～S31）
2代	網本次郎三	（旧中11）	（S32～S35）
3代	森　敏太郎	（旧中1）	（S35～S37）
4代	蔵本　積	（旧中11）	（S38～S41）
5代	皆川　尚常	（旧中14）	（S42～S50）
6代	右近　文三	（旧中22）	（S51～H1）
7代	佐々木甲子郎	（旧中33）	（H1～H2）
8代	岩森　茂	（旧中36）	（H3～H4）
9代	盛生　倫夫	（高2）	（H5～H7）
10代	伊達　昌英	（旧中36）	（H7～H9）
11代	折免　昭雄	（高6）	（H9～H10）
12代	土肥　雪彦	（高6）	（H11～H12）
13代	茶幡　隆之	（高7）	（H13～H15）
14代	大濱　紘三	（高12）	（H15～H18）
15代	碓井　静照	（高8）	（H18～）

支部だより

2006年関東支部のつどい

「修道……あの頃に戻ろう！！」

平成18年７月10日（月）　東京ドームホテル

中　村　　洋（高校26回卒）

「2006年修道学園同窓会関東支部のつどい」

７月10日（月）、東京ドームホテルにおいて開催されました。

関東支部（会長　林　有厚　高校１）では、毎年７月第二月曜日に「関東支部のつどい」として、総会・懇親会を開催しています。今年は私ども「６」期（６回、16回、26回、36回、46回、56回卒）が今年度実行委員として総会の企画・進行担当です。今回は広島から恩師の先生方をお招きし、懐かしく楽しい会をと企画しました。

ご参加いただいた恩師は、今年就任された田原俊典校長先生、河野富士雄先生、鬼塚尚而先生、玉置勝之先生、そして、とてもお元気で80歳になられたとは思えない川野観治先生、総会のサブタイトルは、「修道‥‥‥あの頃に戻ろう！！」です。

恩師登場の総会・懇親会に先立ち、修道ＯＢによる講演会として、弘中惇一郎弁護士（高校16）により「裁判のスピードアップ。誰のため？何のため？」を講演、裁判員制度の実施を控え、タイムリーな講演内容となり、出席者の関心も高かったようです。

林　有厚会長の開会挨拶

田原俊典校長の乾杯

午後７時、村木正顕氏（高校16）の司会により総会がはじまりました。弘中惇一郎実行委員長の

来賓挨拶の田原俊典校長
（壇上に懐かしい恩師の姿が）

講演の弘中惇一郎弁護士

開会宣言から、江崎正行事務局長（高校20）の会計報告、林有厚会長（高校１）の開会挨拶、恩師のご紹介、来賓の髙木一之修道学園同窓会会長代理（高校10）、安松優近畿支部事務局長（高校19）のご挨拶と進み、乾杯のご発声は田原俊典校長先生にいただき、歓談・会食となりました。

恩師、同期生や先輩・後輩との歓談の中、「恩師参加のクイズ大会」の始まりです。クイズ大会は、坂本雅博氏（高校26）に司会を替わり進めます。恩師の方々には、修道への思い出を懐かしい広島弁トークで語っていただき、また、クイズ大会の出題者として、修道にちなんだクイズの出題にご協力をいただきました。クイズは下記の５問

鬼塚先生

河野先生

川野先生

玉置先生

ガライチの問題

閉会宣言を
東正和副幹事長から

が出題でしたが、圧倒的に若者有利と思われる中、三宅利正副会長（旧中39）が高得点を出されたのが、印象的でした。

＜クイズ出題内容＞

（スクリーンを利用した、五者択一の問題です）

1．「ガライチ」（覚えてますか）、新校舎となり現在のコースは？

2．過去、一番東大合格者が多かった年は、合格者何名？

3．現在の女学院中学の制服はどれ？

4．修道中学校の入試問題から一問出題

5．修道学園中高6年間の学費合計は？

最後に、今年度実行委員の「6」期と次年度の「7」期が壇上に上がり、児玉忠弘氏（高校16）の音頭で、校歌斉唱・エールと進み、東正和副幹事長（高校21）の閉会宣言で幕を閉じました。

＜2006年度　実行委員から＞

今年の総会ではムービーの上映を試みています。卒業アルバムから切り出した画像を元にムービーの製作を行い、オープニングからエンディングまで、会場左右の大型スクリーンに懐かしい映像を上映しました。映像の一部、総会風景など、下記の関東支部ＨＰに掲載しております。是非、一度関東支部ＨＰに、お立ちより下さい。

修道学園同窓会関東支部ＨＰ：

http://shudo237.rsjp.net/

出席者全員での校歌斉唱

同期会報告

旧中37・38回同期会

「旧中健児の集い」

平成18年6月9日(金)　リーガロイヤルホテル

佐々木　　博（旧中38）

最初に、表題の「旧中健児」について、触れてみたい。

今年、関東支部同窓会に出席した時のことである。親友の林有厚君（東京ドーム社長）が支部長というご縁で毎年参加している。

出席者513名のうち、私達旧中37・38回6名が最年長で、席上ある後輩から、「先輩旧中とは何ですか」と尋ねられて愕然とした。旧中も遠くになりにけりと思った。そう言えば、同窓会役員も僅か1名で、同窓会報も旧中の記事が少なくなった。旧中とは、旧制中学の略称である。

私たちの修道時代は、太平洋戦争真只中で、勤労動員に明けくれた。原爆投下時は、江波三菱造船所にいたため、生き永らえることができた。

卒業は、4年卒（旧中37回）と、5年卒（旧中38回）に分かれて卒業した。平山郁夫氏は、旧中39回で、新制高校に移行した。

高校1回生に、先述の林有厚君の名が見られる。

昨年、隔年開催を提案したところ、喜寿を迎えた今こそ毎年開催してほしいと、強い要望が出された。幹事で検討していたところに、朗報がもたらされた。

春の叙勲に、4名の級友が選出されたのである。

垂水　公正君　瑞宝中授章　元 大蔵省関税局長
勝村　達喜君　瑞宝中授章　元 川崎医科大学長
甲　　充君　旭日双光章
　　日本ボーイスカウト県連盟副連盟長
正木健一郎君　瑞宝双光章
　　元 大島高等商船学校事務部長

今年の同期会は、受章者の栄誉をたたえる会として、呼びかけたところ、37名の仲間が、かけつけてくれた。

平成7年に作成した71名の名札が、年ごとに減っていくのが淋しい。旧中健児は不滅です。

河本　山本　石川　佐々木　川上　梶山　木村静　深崎　藤東　田村　甲　因幡　槙田　天野　山田陽　山田弘　浜田　冬城　松浦　粟村　大崎　木本　勝村　中村　横島　古西　河野　西原　萬城　新宅　砂堀　三浦　山内　木村知　正木　田中　奥田

同期会報告

白寿の恩師を囲んで同期会

菊　田　良　三（高校４）

高校４回生の卒業54年第34回定例同期会は、６月10日（第二土曜日）に開かれました。昨年は大阪の箕面で開いたため「芳名板」を見ていない者も少なくない。それでまず一部有志が午後５時半、修道に集まりました。休校日ですから玄関ロビーを特別に開けてもらって「希望の光　安芸の小冨士」陶板画観賞、恩師川野観治先生だけでなく、われらが名誉学級担任石田道俊先生（99）も元気な姿を見せてくださって一同感激しました。同窓大会の宣伝に来ていた50回生が「あの人、校長先生（河野君のこと）の先生？」とびっくりしていましたが、生徒にとって校長先生といえばおじいさん世代に近い年寄り、そのまた先生がご健在、ということは当番期代表を驚かせるに足る慶事でしょう。

芳名板で自分の名前と対面のあと、徒歩10分の料亭久里川へ。出席会員は40名でした。すでに物故会員が58名です。最初に黙祷、石田先生の「みんないつまでも元気にやれえ」のご激励、川野先生のご挨拶、東京から来た國光君の乾杯、で開宴となりました。ひととおり全員の近況報告（40人には40とおりの生き方あり）、廿日市混声合唱団に所属する三浦高明君の独唱、酒井久良君のお知り合い神田教子さんの踊りなどがあって歓談２時間、最後はいつものように校歌斉唱と万歳で締めました。

重見　杉田　火浦　国光　加納　鍵崎　行友　谷口　花輪　門　重富　土井　長坂　浜住　三浦　川野先生　上野　中村　菊田　河野　合原　石田先生　斉藤　梅田　大下　三吉　大島　酒井　平見　奥本　内藤　中能

平成18年６月10日　四期会　新校舎入口にて

同期会報告

30年目の修学旅行

沖　野　恒　巳（高校28）

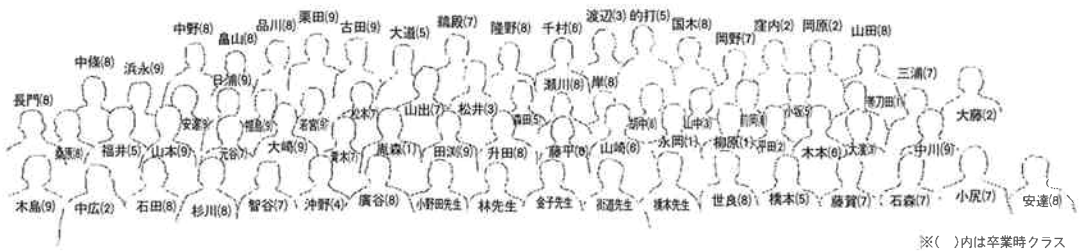
我々、高校28回卒業生は、今年卒業30周年を迎えました。この節目に当たり、多感な青春時代をともに過ごした仲間とともに、修学旅行のノリで楽しくなつかしい時間を過ごしたいと思い、恩師の方々もお招きして去る4月29、30日の一泊二日で宮島にて卒業30周年記念同期会を行いました。

この会には80名を越える参加者があり、宴会とその後にライトアップされた鳥居や厳島神社の社殿を海から見学するナイトクルーズを行いましたが、その景観は近くに住んでいても普段は見ることの出来ない非常に感動的なものでした。翌日には全員で神社に参拝し、本殿にて健康祈願の祝詞を上げていただきました。また、両日とも希望者によるゴルフコンペも合わせて開催しました。

我々は毎年同期会を開催していますが、今回は卒業以来30年ぶりに再会した参加者も多く、夜の宴会はまさに予想したとおりの賑やかな展開となり、宴会後も多くが一室に集合し、すし詰め状態で深夜まで飲みながら語り明かすというよりも叫びあいながら、当時流行った歌まで歌い出す始末で（いわゆる大騒動ですが）、完全に10代に帰ってまさに「修学旅行」と言う雰囲気で旧交を温めることが出来ました。卒業20周年時も宿泊して記念同期会を開催しましたが、50歳に手が届く年齢になった今、多くの友人たちと共に過ごす時間は、その時とは違ってより一層懐かしくまた大変喜ばしく感じられました。

そして、こうした同期会を10年後と言わず、近いうちにまた開いて欲しいという要請があったこと、準備を通して新たに世話役に加わったメンバーや東京在住者で東京支部としての活動を加え、より同期会を充実していく体制が整ったことが一番の収穫でした。

我々は、卒業８年目に行う同窓大会の幹事役を



※(　)内は卒業時クラス

契機としてクラスごとに世話役が自然に出来、毎年の同期会の開催を行ってくることができました。こうした積み重ねで今回の「修学旅行」を行うことが出来たものと思っています。このような同窓会・同期会活動の道を開いていただいた恩師ならびに諸先輩方に感謝と敬意を表すると共に、この伝統を受け継ぎ「知徳併進」「質実剛健」の精神で、より一層精進していきたいと思っております。

最後になりましたが、先輩ということで無理をお願いし、当日は相当なご迷惑をおかけした「宮島グランドホテル　有りもと」様に、この場をお借りして謝意を表する次第です。

同期会報告

旧制中学校33回卒クラス会

北　川　洸太郎（旧中33）

旧制33回卒のクラス会は平成18年5月25日雲一つない皐月晴れの中を広島市東区二葉の里、にぎ津神社の境内に集合した22名によって開始された。先ず神主様の祝詞奏上、玉ぐし奉奠の後、思い出の石段に並んで記念写真を撮った。今年のクラス会ににぎ津神社を選んだのは64年前の卒業時に、にぎ津神社のこの石段の上に立って約200人の卒業生が記念の写真を撮ったことを鮮明に覚えているからであります。そして修道中学を一緒に巣立った者が夫々の分野に進み、国の為、家族のため、自分のために全力を尽くして頑張り、齢82歳を過ぎて生き残った者約80名足らずにまでになった中の22名が一同に会して歓談したことは大変有意義であった。にぎ津神社から隣の明星院にお参りし赤穂浪士の木像を拝見した後、鶴羽根神社内の【二葉】にて昼食をとりながら思い出を語り合った。

修道は280年前から浅野家の藩校として教育の現場を預かっていたので浅野家との因縁は浅からぬものがあり、浅野家の菩提寺であった明星院と明星院から土地を分割してもらい其処に浅野家の神社を建立したにぎ津神社と修道との因縁から見て卒業写真を撮ることは当時は至極当然のことであった。

午前12時から始まった宴会もあっという間に2時間半が過ぎ最後に校歌と応後歌を斉唱して来年の再会を誓ってお開きになった。

同期会報告

臺灣修學旅行

河　野　富士雄（高校４）

昭和27年３月卒業のわたしたちは修学旅行というものをしたことがありません。「一度海外旅行をしょーやー」、誰かの発言にすぐ何人かが反応しました。早速行事担当世話人木下君が台湾旅行を立案、三社から見積書を出してもらっての慎重審議、結局昨年修道高校の修学旅行を世話した実績を買って東急観光（現・トップツアー）と実施案を詰めることになりました。

全会員に案内、参加希望者を募り、衣羽神社宮司大巳君から交通安全のお守りをいただき、留守居役に内藤君を依嘱する念の入れよう、団長に三吉君を選び、15名（別に台北で１名合流）が２月25日10:05広島空港を離陸しました。

飛行時間2°21′で台北空港着陸、すでに亜熱帯、１枚脱ぎました。国内線に乗換え、台湾時14:35高雄空港に着陸、ここは熱帯、真夏の日差しです。空港を出たところで現地ガイド荘千紅さんの出迎えを受けました。この道40年の超ベテラン、日本語は日本の現代女性よりよほどていねいな女性言葉です。お名前の出典は南宋の哲学者朱熹の詩「萬紫千紅総是春」とのこと、朱熹は朱子学を提唱した人ですから、中庸を出典とする校名を戴く修道生とはご縁があったのでしょう。荘さんにおみやげの宮島しゃもじと修道の学校案内を進呈。

最初の観光地は台湾南部の道教の聖地三鳳宮。道教といっても裏に仏教の神様（と荘さんは言うのですが）も祀られています。境内でしきりに爆竹が鳴り、派手で奇態な衣装を着た、日本の八百万の神々の中には決していらっしゃらない「神様」が続々やってきます。地方の集落の人たちが申し合わせて参詣に来た団体だそうです。

宿舎のホテルで夕食の後、六合二路の夜市見物に出かけました。台湾各地の食べ物屋あり、屋台で食事をしている家族あり、そこには、高級免税品店にはない民衆の暮らしの匂いがありました。

２月26日、澄清湖の九曲橋、眺望抜群の湖面に稲妻状に架かった橋です。次いで蓮池潭の龍虎塔、対で建っている塔の一方が入口で龍、もう一方が出口で虎、どちらも大きく開けた口が入口・出口です。

午後、高雄空港から玉山（昔の新高山3952m）付近の上空を越えて花蓮まで飛びました。ここからバスで太魯閣（タロコ）峡谷にはいります。大理石（学問的には石灰岩というべか）の渓谷で、対岸の絶壁の穴に多数の岩つばめが巣を作っているところが燕子口、オーバーハング気味にそそり立つ大岩壁は広島県帝釈峡の太郎岩よりはるかに高い壁でした。慈母峡を渡ったところでUターン、帰路は土地のガイドのチャーミングなお嬢さんが台湾民謡「雨夜花」をタイヤル語と日本語で、「夜来香」を北京語と日本語で、歌ってくれました。

２月27日、花蓮火車站（駅）から特急で再び台北にもどりました。まず故宮博物院。収蔵品数70万点、うち展示されているのは１万点、これを３か月ごとに一部入れ替えているのだそうです。全部見ようとおもったら…

このあと忠烈祠、抗日戦争などで戦死した33万人の国民政府の将兵の霊を祀る所です。剣付き鉄砲を持った衛兵は直立不動、表情も動かさず、まばたきさえめったにしません。まるでマネキンのようです。そばに寄ってツーショットを決めることは自由、もちろんどんな美人が寄ってきても嬉しそうな顔はしません。台北は連泊。

２月28日、九份（キュウフン）。元は９戸しかなかった集落、金が採れることがわかって、海を見下ろす山肌に町が作られました。霧が深くて残念ながら町の外の景色は何も見えません。

基隆を経て野柳（ヤリュウ）海岸へ。途中、宮崎県青島のように岩が互層をなす海岸が見られました。山側に墓苑、お墓といってもちょっとした建物です。しゃれた喫茶店が並んでいるようだと

感想を述べたら「台湾でもナイトクラブと言います、ご先祖様が夜出てきて踊るから」。野柳海岸は、侵食できのこ状に削られた岩がニョキニョキと生えている奇勝です。

3月1日、雨が降るのにご苦労にも4人が早朝からゴルフにでかけました。「その他大勢」はまず龍山寺観光、270年前創建（修道のほうが古い！）、ここは台北市発祥の地ということです。最後に中正紀念堂、故蒋介石総統を記念して建てられた高さ70mの壮大な建物です。正面についている階段の段数89は故総統の没年齢と同じです。

昼食後ミラマゴルフ場で「雨ニモマケズ風ニモマケズ」ゴルフをした4人を拾って一路空港へ向かいました。この道中の寒かったこと、暖房を入れてほしいくらい、もっとも台湾のバスに暖房はついていません。

搭乗待合室で三吉団長解散の辞、離陸、日本時間19:40無事広島空港に帰りつきました。

中正紀念堂　蒋介石総統像の前で

菊田　新谷　河野　平見　大島　大下　中井　斉藤　上野

上野　土井　三吉

（別にゴルフ組：木下、中村、伴、火浦）

同期会報告

修道中学3年6組クラス会開催について

平成18年度　幹事　中野　一美（高校9）
〃　　仲田　章

我々3年6組は、本年も去る7月8日(土) 18:30～より広島インテリジェントホテル「王朝の間」においてクラス会を開催し、24名が参加し楽しいひと時を過ごす事が出来ました。

クラス会には同じクラスの者に加え、特別会員として広島県議会議員の林正夫氏（夫人が代理出席)、広島市議会議員（浅尾宰正氏）の参加を得ました。

ただ残念な事は、例年参加していただく恩師：新見剛士先生が体調の関係から参加していただけなかった事です。

また、我々の年令になると医者の指示で食べ物、アルコール等の制約を受け参加できないもの、不幸にも奥さんを亡くして参加できないもの等参加の意志があっても参加できないものが出るのも致し方ないことです。

それでも参加者の中には、東京、大阪からも駆けつけてくれた人もおり、それぞれの近況を時間の経つのも忘れ語り合いました。

年令も重ねてくると、体の一部を手術したとか、高血圧・糖尿病その他どこの調子が悪かった、という話しが出る度に自分に照らし合わせて大変だなーと言う思いと、参加者一同も気をつけなければと気を引き締められる思いです。

そんな中、現役で活躍の人の外国の生活体験や、中国人相手の商売の難しさ等の話や経験談を聞く事が出来、中学時代には考えられなかったそれぞれの人生の歩みを想定させられ、大変盛り上がった会となり、最後に全員で輪になり校歌を斉唱して締めくくりました。

クラス会の日取りを忘れて参加できなかった者が1人いたのは、年を感じると共に気をつけなければと思わせられた一件でもありました。

幹事としては、来年もこれらの参加者が一人も欠けることの無いように祈るだけです。

同期会報告

6年目に入った月例「修道火曜会」

道を修めたい人が他人（ひと）の道を学ぶ大人の洒落た集いです。

土　井　淳　夫（高校14）

修道高校14回有志が面白い趣向の同窓会（大人の洒落た集まり）を月例でやっています。銀山町のスタンドバーを会場に毎月ゲストスピーカー（講演者）を招き、道を修めたい人が他人（ひと）の道を学ぶという趣向です。会は、毎回、マリリン・モンローとクラーク・ゲーブルをシンボルキャラクターにした盾をカウンターに立て、設立主旨をまとめた以下の宣誓書を読み上げるところから始めています。還暦後のことを見据えて2001年にスタートしましたから、今年6年目に入りました。

参加資格は、修道中学・高校の卒業生で本会の趣旨を理解する者としていますが、有資格者なら女性および他校出身者の同伴可（紹介による出席も可）とし、広く門戸を解放しています。ぜひ一度同伴でお出かけください。毎月第3火曜日午後7時～　会費4,000円（同伴女性3,000円）　飲み放題・食べ放題・歌い放題。 詳しくは、yahooブログーフレー！修道学園●月例「修道火曜会」（高校14回）をご覧ください。

http://blogs.yahoo.co.jp/hurray_shudo_kayokai

「歌謡」「通う」「斯様」「火曜」

月例「修道火曜会」宣誓書は以下の通りです。

――我々「修道火曜会」の男どもは「来た道」がそれぞれ違い「行く道」もそれぞれ違います。

しかし、出発点が修道中学・高等学校だったという「同根の士」であるということについては、この先いささかも変わりようがありません。

この先どこまで行くにせよ、人生の山登りをする者同士があまねく深く理解し合えなくては、これからの道程は殺伐たるものになるでありましょう。

すなわち、本日同伴された女性、接待役をお願いしている「わい、わい」の女性を含めて、幅広く「心が通う会」であることが「火曜会」の面目となるところであります。言い換えれば、二重唱、三重唱の「歌謡」で見事にハモるような「火曜会」であることが尊重されるべきであります。

さらに、ここに参集した紳士淑女はそれぞれの道の専門家で、長い山道を懸命に登って来ているだけに、例外なく一家言持っているはずであります。

通常の飲み会では、たまさか隣りに座った者がその片鱗を垣間見るにとどまりますが、それはあまりにももったいないというべきであります。

「火曜会」に男女のスピーカー役（会の内外からの講演者）を立て、その者の持つ知識や技芸を拝聴・拝見することを毎月の出し物とした所以がそこにあります。

いずれにしましても「火曜会」は、スピーカー役を含めた参加者の一人ひとりが「斯様」な按配で生きている(生きてきた・生きていく)、というあから様を公開し合う場であります。

ならばこそ、ぜひとも大人の集まりでありたい

ものであります。大人とは、体が大きい人という意味では決してなく、心が大きい人のことを申します。

また「わい、わい」におられる他のお客さんからも「なかなか洒落た会だな」と羨ましく思われるようでなくてはならないものと心得ます。

しかるに「洒落た会」とは洒落にもならない言動を忌み嫌うところにあります。逆に、同伴女性を「奥様もどき」とうそぶく様は、愛すべき洒落の世界であります。

かくなる趣旨と心意気の下、本日もかくして月例「修道火曜会」の開会を声高らかに宣言いたします。　平成○年○月○日　火曜日　第○回月例「修道火曜会」幹事　津島則之――

「父兄参観特別授業同級会」

月例「修道火曜会」の始まりは、修道中学３年６組（岡組）同級会を父兄参観授業の形でやったことがきっかけでした。会場はホテルでしたが、修道の懐かしい音色のチャイムを鳴らし、

１時限目「社会」（岡博信先生）
２時限目「数学」（川野観治先生）
３時限目「漢文」（鬼塚尚而先生）
４時限目「英語」（鍵崎卓郎先生）

の特別授業を神妙に受けました。

父兄に当たるのは、終生の厳しい保護者である（はずの）奥様であり、親の批評家に成長されたお子さんであり、目に入れても痛くないお孫さんだということで、各自同伴してもらいました。奥様に見放されている生徒の場合は「奥様もどき」の同伴も歓迎！とも洒落ました。もちろん「♪～丘（岡先生の洒落）を越えて行こうよ……と鼻息荒く社会に出たはずだが、さて、何人かでも先生方の足下に及んだ者がいるか！？」という戒めも忘れませんでした。このときの二次会会場が、現在の月例「修道火曜会」会場になっている「わい、わい」でした。

月例「修道火曜会」でもゲストスピーカーとして恩師を招き、引き続き特別授業を受けています。第58回では「日本史」の的場克己先生に「天皇制－女帝」を、第60回では「国語」の畠眞實先生に「山田十竹先生と修路記」をお願いしました。なお、畠先生にはブログに「修路記」他の連載を快諾いただいています。ブログ記事によって、各学年同窓会における畠先生の講演の機会が増え「修道の真実」(！)に迫る一助となればこの上ないことです。乞うご期待。

「地球平和監視時計」の仲間

我々修道高校14回有志は、広島平和記念資料館東館の時計塔「地球平和監視時計」を2001年８月６日に除幕させた中心メンバーです。ＮＰＯ法人ＰＷＣ（Peace Watch Club　理事長：畠眞實修道中学・高等学校校長）を立ち上げ、めでたく実現させた仲間たちの感動的なドラマは広島ホームテレビの報道番組になりましたが、そこには第２回月例「修道火曜会」の模様が映し出されました。

「地球平和監視時計」とは、ＮＰＯ法人ＰＷＣ（現在はＮＰＯ任意団体ＰＷＣが引き継いでいる）から広島市に寄贈された時計塔のことです。上段の５桁の数字は「広島への原爆投下からの日数」、下段の５桁の数字は「最後の核実験からの日数」が表示されています。新たな核実験が強行されると下段の数字が00000にリセットされ、広島から

の抗議の力を増幅させる役割を担っています。写真は除幕式の模様です。

「人生を渡る橋～錦帯橋」の仲間

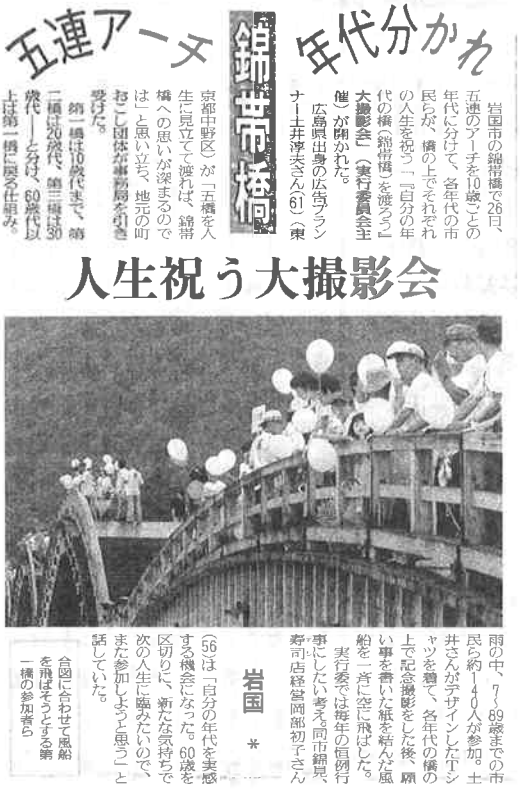
宣誓書にもあるとおり「人生」をテーマにしている月例「修道火曜会」からは、新しい産物が着実に生まれています。時計塔「地球平和監視時計」は人生80年29200日を刻む「人生応援時計」（赤ちゃん成長時計）のアイデアから生まれました。

また、月例「修道火曜会」中心メンバーが支えた（発案もメンバー）「自分の年代の橋（錦帯橋）を渡ろう」大撮影会イベント（2005年6月26日開催）は「人生を渡る橋－錦帯橋」の新しい概念を定着させようという活動です。これは、五連の太鼓橋を人生の物差しに見立てることによって、錦帯橋に自分の人生を確かめる意義をもたらそうとするものです。

つまり、第一橋が「～10歳代の橋」→第二橋が「20歳代の橋」→第三橋が「30歳代の橋」……→第五橋が「50歳代の橋」と渡り、さらに還暦でスタート地点に還り、第一橋が「60歳代の橋」→第二橋が「70歳代の橋」→第三橋が「80歳代の橋」……と渡って行けば、109歳まで測れる理屈です。

人生を共に語り合いませんか

我々は、2005年9月11日に、♪～安芸の小富士に茜さし……の校歌にある似島の頂に立ち自分自身を見直してみよう！という掛け声で小さな登山をしました。「人山を見る　山人を見る」の山



錦帯橋

五連アーチ　年代分かれ

人生祝う大撮影会

岩国市の錦帯橋で26日、五連のアーチを10歳ごとの年代に分けて、各年代の市民らが、橋の上でそれぞれの人生を祝う「『自分の年代の橋（錦帯橋）を渡ろう』大撮影会」（実行委員会主催）が開かれた。

広島県出身の広告プランナー土井淳夫さん（61）（東京都中野区）が「五橋を人生に見立てて渡れば、錦帯橋への思いが深まるのでは」と思い立ち、地元の町おこし団体が事務局を引き受けた。

第一橋は10歳代まで、第二橋は20歳代、第三橋は30歳代――と分け、60歳代以上は第一橋に戻る仕組み。

雨の中、7～69歳までの市民ら約140人が参加。土井さんがデザインしたTシャツを着て、各年代の橋の上で記念撮影をした後、願い事を書いた紙を結んだ風船を一斉に空に飛ばした。

実行委では毎年の恒例行事にしたい考え。同市錦見、寿司店経営岡部初子さん（56）は「自分の年代を実感する機会になった。60歳を区切りに、新たな気持ちで次の人生に臨みたいので、また参加しようと思う」と話していた。

岩国　＊

合図に合わせて風船を飛ばそうとする第一橋の参加者ら

尾三省の詩がいみじくも教え諭しているように、人は山（安芸の小富士）を見て生きるが、山（安芸の小富士）が人を見ているのだ。山ばかり見て進んだ「人生の山登り」に新しい視野が開けるかもしれない…というのがそのときの開催趣旨でした。

月例「修道火曜会」は、ざっといういったことをやっている集まりです。先輩後輩の垣根を取り払って、我々と人生を共に語り合いませんか？問い合わせは、ＴＥＬ＆ＦＡＸ050-1219-3169またはメールでどうぞ。

E-mail:hurray_shudo_kayokai@yahoo.co.jp

特別寄稿

山田十竹先生履歴書

畠　眞　實（元校長・高校７回・修道学園史研究会）

はじめに

この「山田十竹先生履歴書」は、Ａ５版の大きさで、罫紙に手書きされ、紐で綴じたきわめて簡素な体裁である。修道中学校・修道高等学校の記念品室展示資料として長く保存されてきている。いつ、だれによって書かれたものなのかは不明である。この点、資料としての信憑性が問われるところであるが、先に紹介した、「十竹軒遺稿」に収められている、水山烈の「山田十竹翁小伝」の内容と重なるところも多く、しかも「小伝」に比べてより詳しい部分も見られる。いずれが時間的に早いものであるか、現在検証する術がないが、「山田十竹翁小伝」の記述を少しく補うものとして一読の価値はあろうかと判断し、これまで公にされていなかったので、この度紹介する次第である。

この「履歴書」は、漢字・仮名まじりの文語文で、異体字もかなり使われている。ある程度原文の感じを伝えようとして、いくつかは漢語表現をそのままにして注釈を施し、その他は読み易くするために口語に言い換えることとした。人物・事項についての注は最小限にしたため、あるいは充分に理解されない部分があることをお断りしておく。

なお、付け加えると、山田十竹先生の履歴に触れたもので、一番古いものは、明治三十四年八月二十八日の、先生の葬儀における修道校同窓会総代、稲田康太の弔辞であろう。（「修道学園史」に収録）、明治三十六年五月に書かれた、水山烈の「山田十竹翁小伝」は、この弔辞を参考にされたかも知れない。大正三年七月、先生の教え子有志によって二葉の里明星院境内に建立された頌徳碑（昭和三十八年に修道中学校・修道高等学校の校内に移設された。）の「十竹山田先生之碑文」は、修道中学校総理を務めた佐藤正の撰文である。この碑文は「山田十竹翁小伝」を踏まえてのものであることは確かであろうと思われる。このほかに「修道学園の礎」の中に「開校の恩人　十竹山田養吉」（「修道学園史」に収録）という文章もある。

〔本文〕（本文の見出しは、口語文に直す際、便宜的につけたもの）

（国を思い、藩を思う）

山田養吉、父は三太。旧広島藩士、所謂御歩行組（いわゆるおかちぐみ）というものである。

養吉年十六歳、旧藩学校句読師（くとうし）となった。文久二年壬戌（みずのえいぬ）（1862）三人扶持（ぶち）が下賜され、学問所附を命じられた時に天下尊攘の議論がわき起こった。養吉が友と談ずるごとに、わが藩にしっかりとした人材がなく、財力もない、これからどのようにすればよいのであろうかと歯ぎしりして激しく憤り、悲憤の涙も流すのであった。養吉に従兄弟がいる。立野一郎といい、深く国事について憂いていた。その時江戸にいた。彼の友、安藤保之進、木原秀三郎らが藩命を受けて諸藩の間を行き来し、諸事を取りもっていた。これを「周旋御用掛り」という。養吉に弟がいて、片田春太（藩主を助け諸藩の間を奔走周旋する。国事を思うべしと書き残し、自死。）といった。旧藩主にお供して江戸に滞在していた。時に（立野）一郎等が国事について談じているのを聴き、感じるところがあった。しばしば書状を養吉の元に寄こし、江戸に上ってくることを勧め、国家が危急の状態を説き聞かせた。養吉はすぐにこのことを友人の船越八左衛門（後に洋之介、維新後に衛と改める。神機隊副隊長、千葉県令、石川県知事、宮城県知事を務める。）田口太郎（はじめ、学問所句読師。養吉と長州に赴き、七卿らを慰める。洋学所教授。藩命により欧州留学。）、川合三十郎、（後に鱗三。藩校の助教。神機隊の結成に参加。「藝藩志」・

「藝藩志拾遺」の編纂に従事。）星野文平（山田養吉と上記の三人へは京師へ行けとの藩命が下ったが、かれにはなかったため、加藤七郎兵衛宅で屠腹。後、伏見に至り深傷のため死去す。）の四人に相談し、お互いが言うには、わが公の志を尊攘に向けて決するようにできるのは、われら五人である。しかしながら、太平の世が二百年続き、藩の考えはその場しのぎの間に合わせでしかない。この事を役人に告げても取り上げて用いるところではない。（それゆえ）ただ脱藩あるのみだ。しかし、（それには）旅費がないのをどうしたものか。父兄の銭財は私すべきではない、と。五人の者は、みな手を拱(こまね)いている。三十郎が言葉をはさんで言うことに、この時に当たって細事は顧みるところではない。近々、我が家の禄が入ってくる。これを取って出発して、尾道に行き、知人のところにいって相談するだけだ、と。議論はついに決した。そして八左衛門の父は、事件に連座して、多年に亘って幽囚され、この頃新たにその苦しみから解き放たれた。八左衛門はそこで養吉たちに相談して言うことには、昨日の脱藩のこと、固(もと)より甘んじて従うところであるけれども、藩の法は固陋（古いことに頑固に執着し、新しいものを嫌う。）であり、わたしが脱藩すれば、わたしの老父母を再び幽囚の憂き目に泣かせることになる、と。そこで議論は、また遮られた。すでに春太はまた書簡を養吉に寄こし、保之進もまた書簡を三十郎（保之進は三十郎兄）に寄せて言うことに、明春我が公は諸藩主と京師（みやこ）で会し、将(まさ)に大いに議論しようとしておられる。しかし主君の側近には志士（藩のために命をかけて尽くそうとする者）がいないことを悲しむ。国家の安危（安泰か危機かということ）はこのたびの行動にある。諸君は宜しく藩から飛び出して、国のために働くべきである、と。五人はこの言葉をその通であると思ったけれど、ただひとつ、幽囚の一事を畏れる。そこで、養吉はすぐさまこれを小鷹狩介之丞に相談する。養吉の父の執□であって、素より胆識（決断力・見識）があり（※□読み取り不能）。常に国政の不振を憂いていた。養吉の言うことを聴き、深く感じて言うことに、旅銭はわたしがそのために都合をつけよう。幽囚については、あれこれ考える必要はない。そして、あなたはこのことを黒田益之丞に相談し、将にこれを執政辻将曹（江戸時代の老中の異称）君に相談するのがよかろう。話は未だ終わらないうちに、養吉について来る者がいる。その者が姓名を述べて言う、「黒田益之丞」と。益之丞は豪胆で、心くじけることがない。素(もと)より国事を憂う。養吉の話を聴き、これを将曹君に報告する。君（辻）の人となりは、議論を聞くことができ、風神（優れた容貌）は非凡である。仙風と号し、士（立派な男子）の出現を待望していた。確かに、君および黒田、小鷹狩の三人は、常に互いに会して、詩を作り、書を読み、音楽を楽しみ、且つ飲み、且つ談じ、藩政が振るわないことを慨嘆する年があった。諸藩に尊攘の士が立ち上がるのに、わが藝州藩は寂然（ひっそりとしたさま）として、そうしたことを聞くことがないと、互いに話して言うことに、藝州藩は、人材がいないことよと嘆くことすでに久しい。しかるに、今、養吉たちのことを聞き、非常に喜ばしい。

文久三年（1863）春、将曹は将に京師に行き、宮中に参内しようとする。そこで養吉たちを一緒に行かせる。養吉は京師にあって、常に藩士の不振を憤り、しばしば藩主に謁見して説くところがあった。滞在半月、藩主は藩政府を一変したいという志をもった。養吉に藩政職を命じて言うには、養吉に一変させよう、と。養吉はそれで藩に帰り、藩職に入る。しかしながら、太平の通弊（共通して見られる弊害）で、格例（きまり・先例）が諸事を束縛し、案牘(あんとく)（取り調べを必要とする書類や書簡）が山積している。養吉はこの状況を一望（ざっと思いめぐらす）して一介の書生の任務に耐えうるものではないと悟り、辞退して学職に復帰した。養吉が常に思うことには、「人材あれば国即ち盛ん、人材無くんば、国即ち衰ふ。長（州）肥（前）薩（摩）学校の盛大、故に其の国、是の如し。養吉、器局狭隘（人としての度量が狭いこと）、奔走周旋（あちこち駆け回って仲をとりもって世話をすること）長ずるところにあらず。格例・案牘(あんとく)もまた知るところにあらず。且つ、養吉一人にして官事に当たらんよりは、人材を鋳造（育成）して千百人をして官事に当たらしむに如かず。養

吉はただ人材あるを知るのみ。」と。ここにおいて、大いに共に学事について議論し、初めて藩学中の生徒を寄宿させた。そのうえ藩政府が人材を登用することの宜しきを得たい思い、藩老淺野豊後に説明して、藩主に働きかけてもらい、将曹に政事に専任するようにさせた。この年、藩は養吉に切米（大名の家臣のうち、知行所を与えられていない者に対して春・夏・秋の三季に分割して支給される扶持米）拾石を賜り、学問所附を申しつけて言うことに、右（切米のこと）年来は無かったが、学事を心にとめ、学問所・寄宿寮をしっかりとまとめ、監督する等に厚く力を入れ、しだいに御趣意の通りに実行されたので、格別に御切米を下されたのである。

（養吉、長州へ）

元治元年（1864）長門の世子ならびに三条公（実美）その他七卿が京師を脱出して、長門へ落ち延び（いわゆる七卿落で、文久三年八月十八日の政変で、孝明天皇と中川宮が画策して、薩摩・会津藩が加わって京都から尊王攘夷派の長州藩とそれと結ぶ急進派公卿七人を追放した。また元治元年七月十九日には、長州藩と朝廷を固める会津藩・薩摩藩らの諸藩の間で起きた戦闘。禁門の変〈蛤御門の変とも〉が起こった。）、外国人が馬関（下関）を攻撃するに及び、藩は養吉と田口太郎の二人に長門に行かせ、三条公らを慰めるとともにその国の様子を窺うようにと命じた時に笠間の人、加藤有隣が長州に客人としていた。長州の命令を承けて藝州に使者としてやってきて、ちょうど長州に帰ろうとしていた。そこで養吉らに人を差し向け、長州に入るようにし向けた。八月五日、山口に到着し、賓館に至った。六日長州藩士岡儀右衛門、山県半蔵が館にやって来たので、これに応接する。大和国之介もまた陪席をしていて、京師より脱出して帰ってきた次第を弁解した。それが終わって（田口）太郎が先に（藝州に）帰った。有隣は養吉を伴って湯田に赴き、旭翠亭で饗宴に与るときに、馬関の戦いが正に酣で、大砲の音が殷々（大砲・鐘の重々しい音の形容）として亭の柱を震わし、行酒（お酌をしてまわる人）や小鬟（年少の給仕の女性）は顔面に人気がない。有隣はついに養吉を伴い、三条公に謁見させた。公が養吉に向かって言われるには、このたびの我らの挙動は時宜を得ることができず、ついにここまでやって来て、長州公を煩わせることになった。願うことは、善隣の誼（以前からの親しい関係）を以て藝州公に宜しく取り成しを頼みたいということだ、と。（養吉が）ちょうど部屋から退出しようとする時、和歌をいただく。それは

玉の緒のまだ絶えやらで此の秋もながむべしとは志ら菊の花

（この命がまだ絶えることなく、この秋もまた眺めることができるとは思ってもみなかった白菊の花であることよ。）

七日湯田を出発し、十日（藩に）帰る。

この頃、官軍に長州追討の命令があった。十一日、藩政府は養吉と田口生との二人に有隣に書状を送らせて、言うことには、馬関攘夷中は、追討の兵はともかくも遮るので、内顧の患（内向きの心配）なく、攘夷に尽力されるがよい、と。それ以来、有隣は広島にやって来て、しきりに善隣の誼を唱えて、養吉をつれて長州の大島に遊ばせた。九月一日、大島に至る。

ここは長州の国老某の領有するところで、その家臣明良篤之介、その子由太郎、書生青木駿等が代わる代わるやって来て、養吉のもとに控えていた。篤之介が有隣、養吉を誘って船遊びをし、魚を網で捕らえ、新鮮なものを料理する。僧銭念、青木生、土佐藩人小松生もまたともに遊ぶ。酒に酔っている内に有隣が長編の詩を作る。その中に、「豈忘酔裏片言真」（酒に酔ってのひと言にどうして真情がこもっていないことがあろうか。）の一句があった。思うに、酔語は真率（ありのままで飾らない）なる故に、その言を違えず、長州と親交を結ばせようと望んでいるのであろう。篤之介は、温厚、長者（徳が高く、穏やかな人）、学殖（学識）もまた深く、長州人が軽挙（軽々しく物事を行う）妄激（やたらとはげしいこと）、藩事を攪乱することを憂いており、養吉と深い交わりを結ぼうと願っていた。（九月）七日（広島へ）帰る。

（洋学生を率いて江戸へ）

慶応二年（1866）四月、藩命を受け、江戸藩邸学校を督察する。八月に至って長州再征の師が起

こったので国に帰り、その後、再び十一月になって洋学生五十名を率いて江戸に遊学し、そしてまた学生を督察し、さらにまた自らも学び、或いは勿堂若山翁の塾に入り、或いは謹堂古賀翁の塾を督察する。翁たちはみな幕府の家臣である。この時率いた洋学生は渡征元、村上敬次郎、中村孟等もその中にいた。我が県に洋学が広まったのは、このことを以て始めとする。しかしながら、旧友たちは皆養吉を憎んで、言うことに、彼は洋学を始める。彼を見たならば、まずはその面をひっぱたたいて、その後に諫めて誤りを正すほかない、と。

明治元年（1868）藩は高輪泉岳寺赤穂浪士四十七名の墓を修理した。養吉が碑文（表忠碑）を撰した。この頃は京師が騒擾として、官・幕の間に軍事が起ころうとしていた。それで古賀氏は塾生を置くことを辞退した。そこで、（古賀氏のもとを）去って藩邸に住まう時に京師八幡山の戦（慶応四年［1868］一月、いわゆる鳥羽・伏見の戦いにおける旧幕軍と薩摩軍とが戦い、旧幕軍は山崎・八幡・橋本へと落ち、守口を経て、大阪まで敗走した。）があった。

翌年（明治二年）人日（陰暦一月七日、五節句の一つ。ななくさ）に際して、養吉思うに、久しく謹堂師にお会いしていない。今日は人日である。行って、師にお会いしようと思い、お目にかかりたいと来意を告げる。門人が出てきて、わたしを引き入れる。師は椅子に腰をおろし、僧一名、門下生が二、三名いた。僧が去り、門下生が留まっていた。養吉は師に向きあって椅子に着いた。師は忽ち、連発銃を養吉に向けて撃つしぐさをし、言うことに、「おまえは藝州藩の間諜か。今日土佐・藝州人を撃殺しようと思う。」養吉が言うに「わたしは間諜ではありません。洋学生を督察し、自分は漢学を履修しようというだけです。」師が言うに「おまえの（仕える）藝州公は、幕府に叛いている。そうしておまえは悠々とこの地に留まっており、今またやって来てわしに会っている。間諜でなくてなんだというのだ。そのうえ、おまえは京師八幡山戦争を知らないのか。おまえの国の兵が幕府の兵を破った。それなのにやって来てわし会っている、おまえが間諜でなくて、いったい何なのか。」養吉は袒ぬぎになって言うに「撃殺しようと思われるのなら撃殺されよ。わたしは決して間諜ではありません。」と。言葉のやりとりがややしばらく続いた。師が言うことに「おまえが藝州公の思いを改めるように働きかけ、幕府に忠節を尽くすようにし向けるならば、赦そう。」養吉が言うに「このことは一介の書生が判断しうるところではありません。なぜなら、（わたしには）主君があり、父があり、一国の公論があるからです。しかしながら、三つの義（君の恩・師の恩・親の恩）があり、（その一つである）師の恩もまた重い。（わたしの）試みの成る、成らないは、予測はできないけれども、（国に）帰ってこのことを主君に必ず報告いたしましょう。」師が言うに「おまえがよく忠節を尽くすように働きかけをするなら、これをおまえに与えよう。」と。差し向けていた銃を養吉の前に抛った。養吉は（それを）受け取らず、言うには「これは望むところではありません。望むところは、御書です。」と。師の義子（義理の子）某が立ち上がって侗庵、謹堂二翁の書、二、三葉を取りだして養吉に贈った。思うに、師は学があり、識見があり、策略がある。それ故、まず養吉を恐喝し、また養吉をなだめ、藝州公の心を改めさせようとする。後になって、今回の事を思えば、その幕府に忠節を尽くす一介の書生の山田養吉をも利用して、忠節を尽くす幕藩を作ろうとする心は、銃を差し向けられた人よりも、差し向ける人の方が誠に悲しくあろうと思いやられるのであった。

（待賓説）

既に諸藩が江戸邸を撤退して、それぞれの国に退き、藝州邸もまた将に撤退しようとした。養吉はそれで国に帰ろうとした。江戸の医師蒲生重章（今は塾を開き諸生を教える）裴亭と号した。（その彼が）書状を送って言うには、立ち去らなければ、幕府は或いは土佐・藝州人を捕らえようとするかも知れぬ、と。そこで、退去して京師を通り過ぎる。船越、立野らが兵を率いて京都にいた。養吉が京都に留まって兵事に従事するようにと望んだ。養吉は、そこで「待賓説」を作って言うことに、「大賓（大切なお客）有り。主人礼敬して、至るに備え（丁重におもてなしをしようとお客を

お迎えする準備をする)、帷帳を設え、(幔幕を張り)、声楽を具し(音楽の準備をする)、盃盤雑錯す(盃が盛んに交わされる)。肴核繽紛たり(ご馳走があちこち飛び舞うようである)。号して(大声をだして)其の子弟を召し、家人に曰く『賓事方に急なり。汝の常職を擲ちて、我が賓事を執れ。』(お客の接待が今まさにきわめて忙しい。おまえたちはいつもの仕事を放っておいて、わたしのお客の接待をせよ。)厨吏(料理人)これを聞き、亦其の刀を擲ちて(包丁を投げ出し)、盃盤の間を周旋し(酒席の場の取り持ちをし)、酒を行り(勧め)、肴を侑む。既にして盃盤傾く(酒がつきてしまった)。継ぐ(追加する)者無く、肴核(ご馳走)尽く。調する(料理する)者無し。主人愕然として厨吏を叱し、復(ま)た其の刀を執らしむるも、賓喜ばずして、既に去る。

方今、外軍旅(戦争)に従事して、内国の本を忘れる者、或いはこの者に類するところ有らん。(いま、藩は外部に向けては戦争に携わり、内においては国の根本[人材の育成]を忘れている。これは、或いは、今述べた話に類するのではないか。そのように思い)待賓説を為す。

ついに藩に帰り、幾度も人材無くば、盛んならずと上書して、漸く、城南厩の向かい、某の邸を以て書生塾と為して、句読師書生等を賄わせ、読書勉強の場所と為して、日々学校へは通勤する。元、学校中に句読師書生等を寄宿させたことに比較すれば、少しは盛んになった。

(小姓組に抜擢)

この歳、六月藩は養吉を抜擢して小姓組となして、切米弐拾石を下賜し、教授とした。

(明治)二年、黒田益之丞、高間多須衛等が志和八条原に学校を興し、講堂六十畳、寮数五十五、生徒二百余名を入塾させ、そのうえで操練を教えた。養吉に要請して教師とした。盛んと言うことができよう。しかしながら、国論が一致せず、翌年に至って(学校は)廃止された。右の校中で或る人に与えた書がある。それを以て「右校の記」に充てるがよい。これは別に記す。

(廃藩置県による騒擾)

(明治)四年、廃藩置県。淺野公(長勲)、東京に移住。公の夫人(松園)及び公の義父竹館公(長訓)もまた八月四日を以て出発して東京に移ろうとする。しかし、民衆は竹館公を擁留(おさえとどめる)しようとして郡々の人心は動揺する。そこで竹館公は書状を県庁官吏に送って、郡民に告諭するようにと依頼する。県庁はそこで養吉及び佐藤守真、波多野八郎三人に命じて、将に因島に赴いて告諭させようとする。既に因島に至り、告諭する。翌朝、まだ布団にいた。里正が広島参事の書状を持って来た。書状に書いてあることは、「郡民が県城に集まり、説諭を聞いて去る者あり、去らない者がいる。竹館公の東徒(東京への旅立ち)は延引である。早く帰るがよい。」ということであった。そこで帰途につき、十三日、下瀬野里正理兵衛の家に到着し、昼ご飯を食べ終わる。門外に人の声が喧しく、鐘声もまた殷々と、人の振る舞い、ただその様子は、騒擾としている。養吉等は庭の松の根に登って門外の様子を窺ってみると、竹鎗を持っている者が十四、五名である。養吉が二人に言うには、「郡民がわたしに求めるところがあるか。」と。すぐに理兵衛がやって来て、跪いて言うには、「村民はあなた方を太政官だと思っている。」と言う。その言葉がまだ終わらないうちに、竹槍また鎌等を持って勝手口の庭に詰めかけ、門外には三百人くらいも押し寄せていた。養吉が二人に向かって言うことに、「我らがこのようなことに遭遇するのは、運の悪いことである。お互いに居り合って子細を説き聞かせ、それで聞き入れられないとならば自殺しよう。だから、竹槍では刺殺してくれるなと頼むことにしよう。逃げ隠れれば、尋ね出して、いかなる目に遭わないとも知れない。」と言うところへ、理兵衛がまたやって来て、「あなた方にお目に掛かりたい。」と申します、と言うので、養吉は二人に向かって、「くれぐれも三人の身は百姓に任せるのが宜しい。」と申しながら勝手口へ出たところ、上がり口まで詰め寄って、一人が鎌を振り上げて言う。「おまえたちは太政官であって、この下瀬野を焼きに来たということじゃ。」と。養吉が言うことに、「決してさような者ではさらさらなく、斯様、しかじかの次第である。」と言えば、「嘘をつくと鎌がまわるぞ。」と言う。養吉が首を延べて、「斬るなら、斬れ、決して太政官ではありは

しない。」と言ったところ、一人が側から鎌を持った者を抱き去ろうとするのを八郎が庭に下りて、「そこに置け。」と止めたけれども、ついに抱き去って言うことに、「彼は酔っております。」と。ここにおいて、この度入郡の理由を話し、竹館公の依頼の書面を読み聞かせたことで、心の中の疑いの固まりがすっかり解消したと思われ、群衆は漸く散っていった。養吉等は喜んで奥に入る。しばらくして、また前のように遅ればせの者が集まって来る。養吉等はまた前のごとく対応した。そして、また散会した。そこで急いで車を飛ばして帰る。

（明治）五年　広島新聞を始める。これは広島に新聞がつくられた始めである。

（海軍兵学校へ）

（明治）六年　また東京に遊び、七年　海軍兵学校十二等出仕に補せられ、皇漢学を教授し、その傍ら同校出版の「日本志略」を平仮名で編纂する。第一巻は、同校教授近藤真琴の筆になるものであって、以下は皆養吉が編纂した。

（明治）八年　十一等出仕に補せられ、十年　始めて「明治小学」を著述する。思うに、養吉は常に、洋学の道に入った時から、子弟の、攻心（心を鍛え、徳を磨くこと）の学が絶えるようなことを憂いた。そこで、和・漢・洋三国の先輩の言行を参伍（混ぜ合わせる）錯綜（たくさんのものが入り混じって集まる）して、書物を作り始め、十二年になって完成した。九鬼隆一（文部大輔）君が大いにこれを嗟賞（感嘆し褒め讃える）して、自らこれを諸県の県令に頒布した。二、三の県では、これを教科書として定めた。後に静岡県がこれを教科書としたいと要請するに及び、文部省が省令で言うことに、かの書は差し支えるところがある。用いてはならない、と。当時はどのような差し支えがあるのか、格別にこのことを究明しなかった。後に、このことに関して聞けば、同書に「耶蘇曰く」の文字があるということに拠る、と言うことであった。越えて、十三年十二月に出版された。亀谷省軒著述、「修身児訓」という書も、同じく、和・漢・洋三国の人の言行を参伍錯綜したものであって、その書には、「耶蘇曰く」という所は「西洋の諺に言うことに」とあって、これによって、「耶蘇」の文字が差し支えたとしたのであった。

（明治）十三年　兵学校の官制が改まり、十一等に補せられる。八年の間奉職したけれども、身体健康であって、上校しない日は、三、四度である。

（淺野学校へ）

（明治）十四年　旧藩主淺野公（長勳）養吉に広島淺野学校を督察させた。養吉はこれを承諾して、その後このことを友人である兵学校に奉職している者に告げた。友人は驚いて、これを校長に報告し、また海軍卿にも報告した。そこで、養吉に海軍記録課を兼務させて言うことには、海軍史を編集させようとし、そのうえ養吉の思いを諭して言うには、貴殿がもしも留まってくれるのであれば、准□任として、年俸九百六十円を支給しよう、と（※□読み取り不能）。養吉はそこで、友人に書状を送って言うには、「此の度の事、公の為、私の為取り計らい下され、萬謝仕り候。就いては、篤（とく）と思慮仕り候を得れども、鉄鋳の心腸挽回（思い返す）すべく無く存じ候に付、この上は御周旋下され、早く御放還之あり候様願い奉り候。

（大意　この度は淺野公のため、私のためにいろいろと配慮下さいまして、厚く感謝申し上げます。ついては、今回のことをじっくりと考えてみましたけれども、鉄のような固い決意を思い返すことはできないと存じます。このうえは、お取りなしくださって早く、わたくしが国に帰りますことお許しくださいますようお願い申し上げます。）

詩一首　志を陳（の）べ候なり。

男児有志未為灰。一諾千金不可回。願得放鳥閑暇賜。郷黌為国育人材。

（男児志有りて未だ灰と為らず。一諾千金にして回らすべからず。願わくは放鳥閑暇を賜うを得て郷黌、国の為に人材を育てん。（＊大意　わたしは男子として人材育成という志をもっており、未だこの志を捨ててはおりません。したがって、淺野公の申し出を一旦承諾したうえはこの約束をどうしても変えるわけにはいきません。どうかわたくしにお暇を賜りください。郷里の学校において国のために立派な人材を育成したと思います。）

遂に広島に帰って、淺野校の生徒を訓導し、学校は「修道校」と名づけ、額字は淺野公の筆である。

（明治）十七年三月　生徒永尾司馬人を校費で東京に留学させた。六月になって司馬人は書状を送って言うには、「司法省が司法生を募っています。生徒を上京されて、試験に応じさせられるのがよいでしょう、と。養吉はこのことを承諾して、上京のことを密かに生徒に告げる。

（長男の水死）

そうして、七月二十一日養吉の長男得一郎がいわゆる御泉水裏で溺死した。この時養吉の邸は御泉水の境内にあった。学校・塾・共にみな御泉水の境内にあって、生徒は密かに水泳をしていたので、怪我があってはと思い、またその上、水泳をしてもよいように旧水主町の水泳教師二人を雇って水泳を修練しており、この年もいつものとおり、本日より水泳を始めようとする時にあたっていた。その時、養吉は講堂で書籍の講義をしていた。そうしているうち、水泳教師があわてふためいて学校に帰ってきて報告して言うには、「誰であるかは分からないが、指導を受けないで泳いでいて水に溺れた者があります。」と。養吉が立ち上がって走りだしながら叫んで言うには、「よその子を死なせたのか。」と。水辺に辿(たど)りつく。ある者が言うには「得一郎君です。」と。養吉自身は、よその子でなくて少しは安堵したといえども、家には七十歳の老母がいる。妻はお産が数日のうちにあるやも知れないというところで、我が子の死の知らせを聞いて産気づき、ひょっとしたら気が狂ってはと心配をする。

どうしたものかと　思慮すること久しくして、意を決して長男の水死のことをまず母に告げた。老母は聞くとすぐに座を立って神棚に祈る。そうしているうちに人々がせわしく走りやってきて、弔意を述べる者もある。養吉が思うには、もはやこのことを妻に言わずに伏せ通すことはできない、と。そこで表情を引き締め、自らを励ますように大きな声を出して、妻に向かって「今、一大事がある。このことを話して、おまえがひょっとしてかっとなって心を乱すようなことがあっては、山田養吉の面目にもかかわり、そのくらいの覚悟のないような者に淺野学校を任されるのは、任せる者も知れた者だと言われるようなことがあれば、淺野（長勲）公の面目にもかかわるので、少しでも心をとり乱すようなことがあったら、すぐさまにおまえを離縁するぞ。これらをよく心得て気持ちを鎮(しず)めて聞くのであれば、話をしよう。」と言ったところ、夫人は「承知いたしました。」と言う。ここに至ってやっと事の次第を詳しく話したのである。ところが長男の遺体を一晩中探し求めたが、見つからない。翌朝になって引き網にかかって御泉水の裏に引き上げ、裏づたいに自分の住まいに送ろうとするにつけて、穢れたたものが御泉水を通り過ぎるのはいけないとして、舟に乗せて三軒小屋のところに引き上げて、そこからわが住まいへ送ってくれと申しつけた。

その後、五日ばかり経って、妻も無事出産し、ついに狂気を発することもなく、大いに安堵したのであった。

このような大事があったにもかかわらず、生徒を連れて上京されたのは、上京して、入校試験を受けるのに期限もあり、この期限に間に合わないようでは、養吉の職責に反するといって、わが子の葬儀が終わると、すぐに生徒五、六名を連れて、八月十五日に出船して東京に赴いた。死んだわが子と同じ年頃の者、同じ教育を受けた生徒を伴って、特にわが子の死んだ日から僅か二十五、六日しか経っていないために、生徒の後ろ姿を見ては、しぜん人知れず涙を流し、東京に到着した生徒の万事を頼みたいということで、同郷の人三、四十人を金杉楼に招き、詳しく演説をしようと思ったが、ややもすれば嗚咽しそうになるため、遂に演説を止め、この生徒たちをよろしく頼むと言っただけであった。

そもそも溺死のあった始めから自分が思うことは、この時こそ男児が狼狽(うろた)えるべきではないと思い処置は致したのであるが、ただわが子の死を悼む涙には耐えきれない父子の情の割(さ)きがたいことを知るべきである。

この度の生徒は帝国大学校を卒業して、なるのは、判事或いは検事である。秦野健次（のちに判事となる。養吉の二女ハルと結婚。）、梶山延太郎、手島兵次郎、山香次郎吉（のちに大審院判事となる。）の四人もその内である。この年、養吉は広島斯文会講師であった。

（私学への道）

明治19年　淺野学校が廃止されたので、学校の残りの資金を支給して、生徒七、八名をサンフランシスコに留学させたいと淺野公に請願し、「修道校」の額と孔子の神位（これは藩祖賢君恭昭の筆になるもので「至聖先師孔子神位」とある。）とを譲り受け、独力で二度目の修道校を興し、洋学・漢学・算術その他普通の事を教える。

明治20年　諸生を激励のために文詩雑誌を発刊する。「燈火余適」と名づけた。

明治21年　このような田舎では教師を養成しなければ、学校は運営できないと思い、校費で平野久雄を東京に派遣して、算術を学ばせる。

明治22年　海軍兵学校予備科を創設する。

明治24年　山口高等中学校予備科を創設する。

明治25年　海軍兵学校機関生徒廿名募集の内へ、本校池田岩三郎、牧原雄吉、重村義一の三名及第。入校。

同年　陸軍士官学校生徒予備科を創設する。

明治26年　同志士を募り、一会を創め、「赤心会」と名づけ、士気を振起することを以て目的とする。

同年12月　生徒一名、海軍兵学校試験に合格。入校。

同年9月　生徒四名、山口高等中学に入校。

同年同月　生徒二名、陸軍幼年学校に入校。

明治27年9月　一名、幼年学校に入る。

同年同月　二名、山口高等中学校に入る。

明治28年9月　二名、海軍に入る。

明治29年9月　一名、海軍に入り、七名陸軍に入る。

明治30年　生徒三名、陸軍士官学校に入る。

同年8月26日　広島陸軍地方幼年学校教師嘱託。

明治31年8月　右辞職。

同年　生徒五名、陸軍士官学校へ。一名は海軍兵学校へ。一名は第一高等学校へ入る。

同年11月16日　広島県立広島中学校教師嘱託。

明治32年　生徒二名、海軍兵学校へ。一名は陸軍士官学校へ。一名は帝国大学に入る。

明治34年8月21日　広島県立広島中学校教師を辞職。

明治34年8月　従六位に叙せられる。特旨をもって位記を賜う。（宮内省）

明治34年8月26日　逝去。年六十有九。臥虎山（比治山）上に葬る。

校長就任ご挨拶

修道中学・高等学校校長　田　原　俊　典

この度、2006年5月25日付けで校長に就任いたしました。同窓生の皆様方には、日頃より本校の教育にご支援いただきまことにありがとうございます。同窓生の皆様方が築かれてきた輝かしい伝統をさらに発展させていくために、「道を修めた有為な人材の育成」という建学の精神、また、それに基づく「知徳併進」という教学の目標の精神を、時代の趨勢を見据えながら今後の教育方針の中に具現化していきたいと考えています。今年度は特に難関大学への進学実績を向上させるために、生徒の学習意欲をより向上させる具体的な教育活動を展開していくことを考えております。

修道が益々発展するよう尽力する所存でございます。どうか今後とも修道中学・高等学校の教育活動に対して、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

人物往来

王国復活へ「チームワーク重視したい」

久保田文也氏（高28・㈱菱正宗久保田本店社長・広島県体育協会専務理事）

「スポーツ王国広島」復活のタクトを引き継いだ。「(35歳以上の選手が13協議で競う）九月のスポーツマスターズ大会では広島色を出したい。広島国体十年の節目でもある…」。言葉の端々から熱い思いがあふれる。

広島青年会議所理事長の経験から県体協入りしたが、本来は「サッカー小僧」。小学五年から四十歳で地区のチームを引退するまで、選手歴は三十年。修道高ではDF、東京農大では三年までFWで活躍し、四年時にはコーチに就任した。

さまざまな立場で協議に接した経験から、「サッカーは個人技が注目されがちだが、チームワークがよく、総合力の高さが勝敗を分ける」と述べる。「今の世の中も個人主義の傾向がある。こんな時代だからこそ、チームワークを重視したい」。五十の競技団体や七つの委員会などの結束を重視する。

妻孝子さんの兄が、広島市佐伯区出身の指揮者、大植英次氏。義兄の演奏会に足を運ぶ度、「各パートの知識が豊かで、明るく前向きな人間性でまとめている」と感銘を受けている。自らを重ね合わせ、「選手や応援者が何を求めているのか。どんどん試合会場で声を掛けて理解を深めたい」という。

昨年の岡山国体で、広島県勢は総合９位。広島国体以来の８位入賞の目標に一歩届かなかった。王国復活へのハードルは高いが「応援する人とも力を合わせ、スポーツを楽しめる広島にしたい」

1868年から広島市安佐北区で続く酒造会社の五代目。家族は妻と二男一女。

（中国　06.03.28）

個人顧客開拓急ぐ

福田　浩一氏（高23・山口銀行頭取）

景気回復を背景に金融機関の経営改善も進み、2006年３月期は過去最高益を記録する銀行も少なくない。ただゼロ金利政策が解除されれば、手数料体系などもこれまでの横並び策はありえず、各自の実力が問われる。十月にもみじホールディングス(HD)との統合を控える山口銀行の福田浩一頭取に、金融界の現状と今後を聞いた。

－山口銀は山口県のほか、広島県、北九州市、東京都などで営業を展開する。現在の景況感は。

中国地区をみると、科学や自動車関連産業が集積する山陽側は景気回復が順調だ。設備投資が上向き、個人消費にも波及しつつある。この回復は維持するとみている。問題は地域間の格差と、景気回復が銀行の資金需要に結びつかないことだ」

「山陰側は観光振興に取り組んでいるが、山陽側との格差は広がっている。また大手企業は有利子負債を圧縮するため、借り入れに慎重だ。山口県東部の化学大手は東京で資金を調達するため、当行も東京では融資残高が増えているが、（融資残高の過半数を占める）地元山口県では貸し出しが伸びない。中堅・中小企業や個人ローンの需要を拡大する必要がある」

－06年３月期決算見込みをみると、各銀行の業績は好調だ。

「最高益とはいえ、メガバンクも地方銀行も企業業績の改善を背景にした貸倒引当金の戻し入れが上乗せされた結果だ。金利が正常化されるこれからが本当の実力を問われる」

－量的金融緩和政策の解除をどう受け止めたか。

「解除は金利正常化への第一歩だとみている。長い間、ゼロ金利だったので銀行内部でも債券やマーケット運営に当たっての緊張感が欠けていた。金利が動かないためALM（資産・負債の総合管理）の会議も単なる報告会に終わっていた」

「各行は他行との競争上、貸出金利を上げられないでいるが、定期預金金利は先走って上げているのが現状だ。今後は手数料の体系も見直さないといけない。横並びは許されない。ゼロ金利の解除は10－12月ごろではないか」

－10月に山口銀ともみじHDが統合する。

「３月中旬に持ち株会社の株式移転比率が決まっ

たので、4月からは統合委員会の部会を統合後のグループ戦略を立案する『準備室』に改組した。重複部分を整理するだけでなく、新たなビジネスチャンスを掘り起こす」

「当行はこれまで『融資にばかり力を入れて、預金をしてもお礼を言われない』との批判を一部から受けたが、統合後には個人向け預金の新商品もいろいろ出していきたい。中四国で最大、かつ健全性、収益性、顧客からの信頼の点で最高の金融グループを目指す」

ー地域と金融機関のあり方をどう考えるか。

「地域が成長しなければ、銀行も成長できない。山口県は今秋の国民文化祭や11年の国体の開催も控えるだけに、地域の銀行として支援していきたい」

（日経　06.04.05）

「見て幸せになる人がいる」と信じ、過激ドラマ

遊川　和彦氏（高26・脚本家）

天海祐希さん演じる笑わない鬼教師が、大反響を巻き起こした昨年夏の連続ドラマ「女王の教室」（日本テレビ系）で、優れたテレビドラマの脚本に贈られる第24回向田邦子賞を受賞した。

「最近、原作ものが多くて、オリジナル脚本が弱いですよね。『ドラマってこんなもんか』と、なめてる視聴者の横っ面ひっぱたくつもりで賭けに出ました」。やや早口で、とがった言葉が口をつくのは、作品に注いだ情熱の量ゆえだろう。

「いいかげん目覚めなさい」のセリフとともに、小学六年生に厳しい社会の現実を突き付け、逆らえば罰を与える鬼教師に、初回から批判の電話が日テレに殺到。番組ホームページの掲示板は賛否両論、沸騰した。

「初めて視聴者に『放送をやめろ』と言われたけど、しめしめと思ってました。プロデューサーと覚悟決めて、曲げずにやろうと。こちらに信念があれば大丈夫だと」。視聴者の反感は次第に共感へと変わっていった。

脚本家になって十九年。今でも、高校時代の文化祭で脚本を書いた喜びが基本だという。「愛だと思うんです。自分のドラマを愛してないと伝わらない。だから役者にも嫌なら降りてくれと言うし、これを見て幸せになる人がいると思ってやらないと。青臭いと言われても、それを示さなきゃ、若者も育たない」

今は天海さん主演のコメディを執筆中。「今度はテレサ・テンみたいな演歌的世界」。おもしろいよもちろん、笑顔にそう書いてあった。

（中国　06.04.25）

頼山陽著「日本外史」　現代語訳が完結

藤高　一男氏（高校10）

頼山陽著「日本外史」の現代語訳刊行に取り組んできた藤高一男さんが、訳書最終巻となる「日本外史を読むⅤ」を刊行し、全五巻が完結した。

原著は平氏から徳川氏までを漢文体でつづった全二十二巻。現代語による全訳本は戦前にあるが、現在は入手できない。若者から中高年まで幅広い層が気軽に手にしてほしいと、全訳刊行を進めてきた。

最終巻の「日本外史を読むⅤ」は、徳川氏の隆盛を記した原著の十九巻から終巻までを収録。家康と武田信玄の戦いから徳川政権の樹立や大阪冬の陣、夏の陣まで詳細に記述し、その後、十一代将軍家斉の治世までを概観している。

藤高さんは「徳川時代に生きる儒学者として、山陽も徳川にあまり批判的なことは記していない。しかし底流に武士政権への批判が垣間見え、山陽らしさがうかがえる」と評する。

8年前、頼山陽史跡資料館の勉強会に加わり、「歴史の動きが生き生きと浮かび上がってくる」日本外史の魅力を知ったのが、現代語訳に取り組むきっかけ。

「儒学思想に基づいてつづられた日本外史は、忠・義・孝といった観念が希薄になった現代にこそ読まれるべき書ではないか」と語る。

原著は人物名を初出時に姓名を記述し、以降は名だけとするため読みにくいが、訳文ではすべて姓名を記して理解を助けた。

（中国　06.05.31）

訃　　報

原田　睦民氏

（旧中33回　前全国農協中央会（全中）会長・元広島県議会副議長）

2006年５月18日　逝去。享年81歳

氏は1994年４月１日に発足した、修道学園同窓会連合会（修道学園のさらなる発展を期するため、学校法人修道学園の設置する中学校、高等学校、短期大学、大学及び大学院の３つの同窓会がそれぞれの独自性を保ちつつ、これらをすべてまとめた連合調整機関として新たに修道学園同窓会連合会が組織化された。）の初代会長並びに名誉会長をつとめられた。

船橋　英男氏

（旧中35回　船屋社長）

2006年４月９日　逝去。享年79歳

氏は修道学園同窓会連合会幹事・修道学園（中・高）同窓会幹事並びに評議員をつとめられた。

中村　　法氏

（元修道中学校・高等学校教諭）

2005年11月９日　逝去　享年92歳

氏は1965年４月１日から1974年３月31日までの９年間、国語科の教諭として修道の教育に携わられた。

脇田　久二氏

（元修道中学校・高等学校教諭）

2006年４月８日　逝去　享年91歳

氏は1944年４月１日から1951年12月31日までの７年９月、国漢科の教諭として修道の教育に携われた。

心からのご冥福をお祈りいたします。

事務局だより

修道に学んだ第21代内閣総理大臣 加藤友三郎の銅像復元にご協力を

先の日本海海戦において、連合艦隊参謀長として日本を勝利に導き、ワシントン軍縮会議において軍縮条約の締結に貢献され、後に内閣総理大臣となった加藤友三郎は広島市中区大手町で生まれ、幼少期は山田十竹先生の門弟として修道館に学ばれました。死後、数々の業績を称えるため比治山公園内に加藤友三郎の銅像が建立されておりましたが、昭和18年金属回収令によって供出され今は台座が残るのみです。

この度、この銅像を復元することが関係者各位により計画されております。2007年12月末を目途に広く募金活動が進められております。趣旨にご賛同の方々は募金にご協力をいただきますようご案内いたします。詳細につきましては、下記事務局までお問い合わせください。

内閣総理大臣加藤友三郎 銅像復元委員会
会長　碓井静照（高８回）
委員会事務局
〒732-0033　広島市東区温品６丁目23-14
田辺　良平方
TEL＆FAX　082-289-1082

趣　意　書

加藤友三郎は文久元(1861)年、広島市大手町に生まれました。第21代・12人目の内閣総理大臣です。

若くして海軍軍人を志し、日露戦争の日本海海戦では聯合艦隊の参謀長として、わが国の勝利に貢献しました。大正10(1921)年、ワシントンで開催された「海軍軍備制限などを主とした国際会議」いわゆる「ワシントン軍縮会議」に日本代表の首席全権として、海軍大臣・海軍大将でありながら敢えてフロックコート姿で出席して「国際協調」の精神を体現し、会議では、当時の国際情勢と国益を踏まえ自ら全責任を負い、軍備縮小案などの諸条約を締結しました。

帰国後、首相を拝命し「ワシントン軍縮会議」

の国際協調と軍縮の精神を忠実に断行しましたが、このことは、軍備増強によるわが国の財政破綻を救っただけではなく、日本の国際的孤立化を防ぎ、世界中から多くの称賛を得たのであります。

この功績を称えて昭和10(1935)年、等身約2倍大の銅像が多くの国民の善意と好意により、海軍大将の礼服姿で建立されて多くの人が訪れて彼の遺徳を偲びました。しかし、先の大戦における金属回収令により銅像は撤去されて、台座のみが長い年月にわたり風雨にさらされ、加藤友三郎の功績すらも消え去ろうとしているのが現状なのです。

戦後も60余年と還暦を経過し「世界平和」を唱える広島にとっては、いまこそ偉大な先達の足跡を辿り後世に引き継ぐことが、現代に生きるわれわれに課せられた使命ではないかと思われるのであります。

このような思いから、この度、別記のとおりの顧問各位と委員らの発起により、銅像の復元が計画されました。つきましては、広島ゆかりの方々のみならず、多くの皆さま方からの浄財により復元を企図致しておりますので、趣意ご理解の上何分のご協賛を賜り、本事業が成就致しますようお願い申し上げる次第でございます。

加藤友三郎の復元銅像の概要、ならびに彼の功績・経歴などは次のとおりです。

加藤友三郎　復元銅像の概要

(1) 銅像復元場所　比治山公園内（かつての加藤友三郎銅像台座上に復元）

(2) 銅　　像　等身約2倍大（ワシントン軍縮会議出席の際のフロックコートに山高帽姿の予定）

(3) 台座銘刻　ワシントン軍縮会議首席全権・内閣総理大臣　加藤友三郎（銘刻の書は、広島大学名誉教授　森井一幸氏に依頼予定）

(4) 募金目標額と期限　金3000万円、平成19(2007)年12月末まで

(5) 募金基準額　一口2000円以上

(6) 復元除幕式予定　平成20(2008)年8月24日（逝去後85年目に当たる日）

(7) 銅像制作者　吉田正浪氏（比治山大学短期大学部教授・新制作協会会員、広島文化賞受賞、元衆議院議長灘尾弘吉像など制作。広島市在住）

(8) そ　の　他

① 3万円以上協賛の方には銅板に名前を刻み謝意を表します。なお全ての協賛者の名前を記載した「記念誌」を発行して配付する予定です。

② 状況により上記案を変更する場合もあります。　以上

加藤友三郎の功績

軍人としての加藤友三郎は、日清戦争で黄海海戦に参戦して軍功を挙げ、さらに日露戦争では聯合艦隊参謀長として、日本海海戦を勝利に導いたことは、つとに有名であります。また軍政家としても、海軍次官、海軍大臣を9年間もつとめ顕著な功績を残しています。

特に、第一次世界大戦当時、外敵からの防備のために、海軍の増強を図ることの必要から「八八艦隊」の編成が提案され、これに向けて軍備の再編が進められました。ところが軍備拡張によるわが国の国家予算は膨張の極に達することとなり、大正10年度では国防費は総予算の50%にも達するという、異常な状態となったのです。このままの状態を続けていてはわが国の財政は破綻に至るとの見地から、軍事費を縮減して財政の立て直しが迫られることとなりました。一方、アメリカ、イギリス、フランスなどを中心として国際世論も軍備の縮小が叫ばれるようになったのです。

これを踏まえて、大正10年10月から翌年2月にかけて、ワシントンにおいて「海軍軍備制限と大平洋・極東に関する諸問題を協議する国際会議」いわゆる「ワシントン軍縮会議」がもたれることとなり、加藤友三郎はこの会議への首席全権として臨んだのであります。

会議でアメリカは、わが国の海軍設備を対米英比6割に縮減するよう提案してきました。軍部の中にはこの提案に反対の意見が大勢を占めていましたが、友三郎はわが国の財政状況や、当時の国

際情勢と国益を踏まえ、国際平和維持の観点などからして妥当な線と判断し、軍部の反対を抑えて対米英比６割の提案を受け入れることとして諸条約を調印したのです。このときに軍部に対して述べたといわれる「国防は軍人の専有物ではない。国防は国家総動員の上に築かれなければならぬ。言い換えれば、民間工業力や貿易が盛んに行われて、国富の裏打ちがなければ、国防力は高まらぬ」という発言は、現在でも十分に通用する名言とされています。

大正11年６月、軍縮会議後の施策推進に最適任者として、内閣総理大臣に任命され就任しました。友三郎は、海軍の予算を３割削減、陸軍の兵員を５万人減らすなどの大英断を下したほか、わが国に大きな負担を強いていたシベリア派兵を撤退させ、さらに中国の山東問題を解決するなどして隣国との協調にも配慮しています。これらの諸政策を断行して「ワシントン軍縮会議」の国際協調と軍縮の精神を忠実に履行したのです。また、軍事予算の縮減分を教育や民生の充実に回しているのであります。さらに、軍部大臣の武官専任制廃止に共鳴するなど「議会政治への理解者」としても優れた意見をもっていました。

これらのことは、軍備増強によるわが国の財政破綻を救っただけではなく、日本の国際的孤立化を防ぎ「国際協調」という新時代に導いたことを示すものであります。まさに、広島が生み、海軍が育て、世界が認めたビッグ・ステイツマンであると言えるのであります。一方、内政においては、一般行政費の節約にも力を注ぐとともに、国民生活に直結する物価の安定対策として具体的な政策をかかげ、速やかに実行すべく各省庁を督励しているほか、綱紀粛正にも果敢に取り組んでおり、自らも率先遂行して範を示しております。

平素は極めて寡黙・慎重で、必要なこと以外は口に出さないといわれていましたが、議会での演説や、質問に対する応答に対しては大胆雄弁で、別人の感があったと語り継がれています。

加藤友三郎の経歴

文久元年(1861)	２月22日、広島市大手町（現在の大手町第二公園内）で、加藤七郎兵衛の三男として出生。父は藩校の助教授をつとめていた
慶応元年(1865)	この頃、藩校「修道館」や私塾「高木塾」などで学ぶ
明治６年(1873)	海軍兵学寮入学
明治13年(1880)	北アメリカ方面や南洋方面などの遠洋航海に出航
明治19年(1886)	海軍兵学校砲術教授心得兼生徒分隊士心得任命
明治21年(1888)	海軍大学校副官任命
明治23年(1890)	高千穂艦の砲術長任命
明治27年(1894)	清国との黄海海戦・旅順口海戦に参戦
明治31年(1898)	筑紫艦艦長任命
明治33年(1900)	海軍教育本部第一部長任命
明治38年(1905)	ロシア艦隊との日本海海戦に聯合艦隊参謀長として参戦
明治39年(1906)	海軍次官任命。南満州鉄道設立委員任命
明治41年(1908)	日本大博覧会評議員任命
明治42年(1909)	海軍次官免じられ、呉鎮守府司令長官任命
大正２年(1913)	第一艦隊司令長官任命
大正３年(1914)	第一次世界大戦勃発・ドイツとの戦役に参戦
大正４年(1915)	大隈内閣の海軍大臣に就任。以降、４内閣の海軍大臣歴任
大正10年(1921)	ワシントン軍縮会議首席全権任命
大正11年(1922)	６月12日、内閣総理大臣兼海軍大臣任命
大正12年(1923)	８月24日逝去。勲功により男爵から子爵に昇爵。正二位に叙せられ元帥の称号が贈られる。葬儀に際し宮中から「御来」を賜る
昭和10年(1935)	遺徳を顕彰するため比治山に銅像建立
昭和18年(1943)	金属回収令により比治山の銅像撤去
平成15年(2003)	没後80年祭を、大手町第二公園内の生誕地碑前にて執行

比治山公園内に残る台座

お詫びと訂正

6月1日(木)開催の合同幹事会記録「幹事会資料1　修道学園（中・高）同窓会会則の改正について」に下記のとおり誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。

正	誤
第8条　本会に次の会員を置く。 一．幹事70名以内。ただし、13名を下ることはできない。	第8条　本会に次の会員を置く。 一．幹事59名以内。ただし、13名を下ることはできない。